

岐阜・城之内遺跡

- 1 所在地 岐阜市長良字城之内
- 2 調査期間 一九九二年(平4)四月～十二月
- 3 発掘機関 岐阜市教育委員会
- 4 調査担当者 内堀信雄
- 5 遺跡の種類 集落跡・居館跡
- 6 遺跡の年代 前一世紀～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

城之内遺跡は、岐阜市内を北東から南西へ流れる長良川の北岸扇状地上に立地している。この付近は、以前から天文元年(一五三二)



(岐阜)

に美濃国の守護大名土岐氏が移った枝広館跡に比定されている。

城之内遺跡の調査は、長良公園の建物建設に伴う事



前調査であり、岐阜市教育委員会が一九九二年度に実施した。調査の結果、弥生時代中期から戦国期にかけての多数の遺構が重複して見つかった。戦国期の遺構には、居館の堀跡(北西コーナー部)、区画溝(館内及び館外)等がある。堀跡の一部では土塁と法面が崩落し、崩落土直上も含め全域で厚さ約1mの洪水砂層が認められた。こうした状況から、この館は洪水によって廃絶した可能性が高い。

堀内の洪水層からは、木簡一点の他、木箱二個、漆器、折敷、曲物、箸等の木製品が出土した。木簡は、堀跡北辺部(北西コーナー付近)の堀底直上の洪水砂層中から出土した。出土状況からみて、洪水時に近くから流されて来たものと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) □□□□南へ屯間半 大桑□□

232×27×2 051

全体の意味は不明であるが、何らかの物品を館に持って来た時、あるいは館から運び出す時の付札の可能性がある。「大桑」の記載があることから、大桑の地との間の関連性も推測できる。

発掘で見つかった館跡を枝広館と断定できる証拠はないが、一辺

二〇〇m前後という規模や、出土遺物の年代が一致すること等から、その可能性は高い。館廃絶の契機となった洪水は、天文四年（一五三五）の長良川大洪水であると推定できるが、この洪水の結果、土岐氏の本拠は大桑城へ移ったとされる。木簡に記された「大桑」の評価等今後の検討課題としたい。

9 関連文献

内堀信雄「土岐氏居館推定地の発掘調査」『日本歴史』五四一九九三年

（内堀信雄）

『平城宮発掘調査報告』Ⅵ（一九七五年）に、次のような二つの木簡が載っている。

〔木簡19〕

□田郡□
□王部□

（嶋郷）

□

(105) × (33) × 4 081

〔木簡22〕

□

□

（綿）

□

（綿）

□

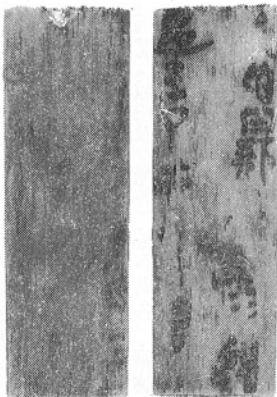
□
□
□
□
□

（右）

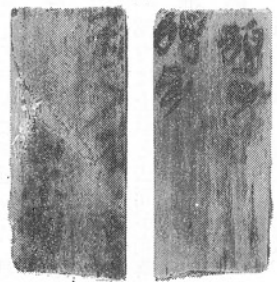
□尔國

(72) × (31) × 5 081

いずれも平城京左京一条三坊十五坪内の溝SD四八五から出土した木簡である。この二つは、その特色ある書風や形態からみて、もとは一つの木簡であろう。双方に同一とみられる文字があるが、釈文としては木簡19が正しく、木簡22の「綿」と読まれている字は、木簡19表一行目の下端の字や同二行目下から第二字と同じで、「郷」と読まれるべきである。「綿」と読まれたのは、一行目の字の末尾に横画があるためであろうが、これは第二字の初画が第一字に重なって書かれているに過ぎない。そのことは二行目と比べれば明らかである。「郷」の下の子は、同じ溝から出土した木簡5に見える「多」の異体字に類似する。なお裏面の書も相互に似ており、二つに切断されて廃棄されたものが、別々に検出されたとみてよいであろう。（東野）



(19)



(22)